元日号特集　海外教友ルポ

母国の未来を担う人材　一人でも多く育てたい

ヒマラヤ山脈を擁する自然豊かな地として知られる南アジアのネパール。その一方で、国連の規定する〝最貧国〟の一つに数えられ、不安定な政情と相まって、都市部と農村部の貧富の差などが大きな課題となっている。本紙エッセー「カトマンズの空から」を連載中のアミーラ・ダリさんは、1991年に自ら立ち上げたNGO「ラブ・グリーン・ネパール」代表として、緑化、農村部の地域開発、女子教育といった草の根の支援活動を繰り広げている。「自分で気づき、切り開かなければ何も変わらない」。さまざまな壁にぶつかりながらも、持ち前の行動力とお道の教えを胸に、母国の発展のために力を尽くしてきたアミーラさん。ライフワークともいえるNGO活動を取材すべく、12月初旬のネパールを訪ねた。

ラブ・グリーン・ネパール代表　アミーラ・ダリさん【56歳・豁郷分教会教人】

緑化、女子教育…〝草の根〟の取り組み20年

「天気が良い日は、ここの屋上からもヒマラヤが見えますよ」

首都カトマンズの南、パタン郊外にある高台。レンガ造り3階建ての最上階がラブ・グリーン・ネパールのNGO事務所だ。

アミーラさんの案内で屋上へ上がる。青空の向こうに靄がかかり、残念ながら白峰は望めなかった。隣の敷地では、秋に開花するヒマラヤザクラの高木が、薄ピンクの花と緑の葉を半分ずつたたえている。

建物の1階は、NGOと同時期に立ち上げた苗木の組織培養会社。いまは夫のドゥリゲスさん（61歳・同教会教人）が取締役を務める。2階は、日本のODA（政府開発援助）を取り扱う日系商社の現地事務所。アミーラさんは平日、ここでマネージャーの仕事をこなす。

道を挟んだ向かいには、NGOや契約農家へ卸すための苗床がある。いま取り組んでいるのはキリの苗木作り。資源の多くを隣国インドからの輸入に頼っている現状を踏まえ、国産の建築資材の一つとして、成長が速く、ネパール国内にも自生するキリに着目したという。

「木を育てるって大変。人間の子供は泣いて教えてくれるけれど、この子たちは何も言わないから」

ビニールハウスの中で出荷を待つ苗木に囲まれながら、流暢な日本語で話すアミーラさん。

「この子たちが育ったら、日本で見るような桐だんすを作ってみたい」

すべては1本の植樹から

週末、NGOの活動フィールドへ向かうアミーラさんに同行した。

平日は商社の仕事に追われるアミーラさんにとって、NGO活動に専念できる週末は貴重な時間だ。

この日は、カトマンズの東約50キロの渓谷に広がるパンチカール村へ。20年前、NGOが初めて設けたフィールドだ。

標高1千300メートルのカトマンズ盆地から車で1時間半も走ると、山道の眼下に亜熱帯の緑地が姿を現した。周囲の急峻な丘陵部には、帯状の段々畑が幾重にも連なる。車を降りると、上着がいらないほどの暖かさだ。

一見、のどかな農村風景だが、NGOが活動を始める以前は、無計画な森林伐採により、ほとんどはげ山に近い状態だったという。

「とにかく1本ずつ木を植えよう。すべては、そこから始まったんです」

カトマンズ市内の大学院を修了後、松本滋・豁郷分教会長（故人）の導きで天理大選科日本語科（当時）へ。上智大学大学院、㈶海外技術者研修協会（AOTS）での研修を経て帰国。日本のODA事業の立案などに携わり、多忙を極めるなか、ネパール国内の森林破壊のニュースを知った。

「単純な発想だった。人々は薪を得るために木を切る。木がなくなれば、また別の森へ行く。それなら、代わりに木を植える人がいればいいんじゃないかって」

多民族・多言語が共存し、集落ごとにさまざまな文化・風習が息づく同国。環境保全の重要性を訴えても、保守的な考え方の根強い農村部の人々は、なかなか応じなかった。

それでもアミーラさんたちは、最初から自分たちの考え方を押しつけることなく、村人一人ひとりの要望を聞き取ったうえで、地道に理解と協力を求めた。やがて一人、また一人と、NGOの趣旨に賛同する村人が現れた。

1本の植樹から始まった取り組みは、その後、村を挙げた大規模な植林事業、薪の代替燃料となるバイオガスプラントの設置、化学肥料や農薬に頼らない有機農法の導入、収穫物の販路確保など、多岐にわたる分野へ発展。これまでに、累計100万本の植樹が行われた。

パンチカールで農業を営むミタラム・ドゥラルさん（47歳）は、当初からアミーラさんらの良き理解者となり、共に活動を推し進めてきた一人。

「アミーラさんたちは、集落の者と同じ目線に立って村の未来を考えてくれた。ほかの住民たちから『何も知らない都会者の言うことを聞くのか』とたしなめられたこともあったけれど、いまの緑豊かな村の姿を見て、そんなことを言う者は一人もいないよ」

最近設置されたミルクの冷蔵センターをはじめとする家畜飼育支援事業は、ドゥラルさんら村民のアイデアを取り入れたもの。さらに、パンチカールでの実績をモデルとして、近郊の村々でも同様の取り組みがスタート。近年では、意識の高い農家が自らリーダー役を務め、NGOの助言のもと、ほかの農家の指導に当たっている。

隣のアナイコット村で減農薬・減化学肥料農法に取り組むビスヌ・プラサードさん（41歳）は、「以前は収入さえ安定すればそれでいいと思い、化学肥料を使い続けていた。NGOの人たちに出会って、子供たちの未来のために、きれいな水と土を残すことが大切だと気づいたんだ」。

一連の取り組みは、村の若者の意識をも変えつつある。アナイコットでNGOによる有機農法の研修を受けている農家の多くは、20代、30代の若い世代だ。

その一人、サンギタ・ダカルさん（20歳）は、「いままでは、学歴のある人は家業を継がず、カトマンズへ働きに出るのが常識だった。でも私たちは、大学を出た後も村に残り、この新しいやり方で両親の農業を支えようと決めたんです」。

◇

翌日、今度はカトマンズの西へ延びる山道を車でひたすら上る。

「この道を通ると、留学時代に富士山へ登ったときのことを思い出すの」

2時間ほど上り、一帯の最高地点を示す「HEIGHT2030M」の標識を過ぎると、澄んだ空気の中に集落が見えてきた。9千人ほどが暮らすバジャラバラヒ村だ。

ここでも、NGOの指導のもと80人余りが、ジャガイモ、ピーマン、カリフラワーなどの減農薬・減化学肥料農法に取り組むほか、バイオガスのプラントが50棟設置されている。

現地協力者の一人、サヌカジ・ゴパリさん（38歳）の自宅へ案内された。2階の寝室の天井には、トウモロコシの束が幾つも吊るされている。冬を越すための貴重な栄養源だ。

ネワール族とチベット系のタマン族が混在するバジャラバラヒでは長年、トウモロコシや米などの穀物栽培が中心。しかし、冷害などで不作になると、たびたび食糧不足に悩まされてきた。

20年余り前の調査により、村の土壌が野菜栽培に向いていると判明。その後、NGOが本格的に現地へ入り、収入源となる野菜の種やランの苗木を提供するようになった。

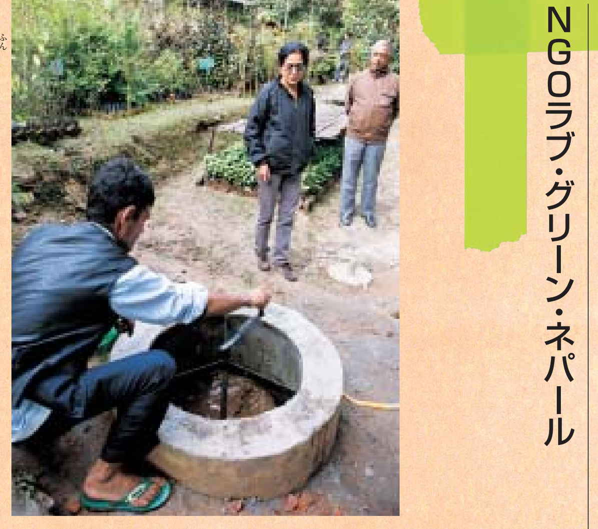
NGOが管理する村内の農場で、収穫したてのキウイフルーツを頂いた。日本で見るものより少し小ぶりだが、甘みが強くておいしい。

「水が豊富だから、魚も多いし、作物もよく育つ。……そうだ、ここで取れるジャガイモで〝ご当地コロッケ〟を作って魚と一緒に名物にするのはどうかな。木もたくさん植えて、都会の生活に疲れた人たちがひと息つけるような場所にすれば、観光名所にもなる……」

次から次へと出てくるアイデア。村の将来を生き生きと語るアミーラさんの周りには、いつしか村人たちの輪ができていた。

NGOが最初に活動を始めたパンチカールの風景。20年前は、はげ山に近い状態だった

NGOラブ・グリーン・ネパール


家畜の糞を活用したバイオガスプラント

1991年にアミーラさんらスタッフ8人で設立。日本法人のNPO「ラブ・グリーン・ジャパン」とのパートナーシップのもと、主に日本の官民基金や民間企業の協力を得ながら、緑化、農村開発、教育支援などを展開している。

これまでの実績は、ネパール国内八つの村で、植樹110万本以上、学校の修復・新築31カ所、バイオガスプラントの設置1300棟など。

当初、事務局長だったアミーラさんは、2007年に代表に就任した。

見上げるほどの高さに育った植林

新築された校舎で学ぶ子供たち

奨学生たちとともに。「自分の名前も言えなかった子が、夢を語る瞬間がうれしい」（パンチカールで）

「私たちの夢を実現します」

パンチカールにあるNGOの現地事務所の施設内には、有機作物の試験場や苗床などに加えて、瀟洒なレンガ造りの研修施設がある。

中に入ると、20歳前後と思われる女性20人ほどが集まっていた。

「今日は『リーダーシップ・トレーニング』の日。ここへ来ると、すごく元気をもらえるんです」とアミーラさん。

NGOが農村開発と並行して取り組んできたのが、農村部の女子奨学制度や校舎の新築・修復をはじめとする教育支援だ。

「村の大人たちの中には『どうせ嫁に行くのだから、高等教育は必要ない』と言いきる人が少なくなかった。でもよく聞けば、教育を受けさせたくないのではなく、本当は学校へ行かせたいけれど、経済的な事情が許さないという親がほとんどだった」

早速、女子教育のための奨学基金を設立。卒業後、母校での2年間の教員実習を条件にすることで、地元へ人材を還元する一助とした。

加えて、奨学生を対象とする独自のトレーニング・プログラムを立ち上げた。主な目的は「彼女たちに自信をつけさせること」という。

「種族間の格差の問題などもあり、特に少数民族出身の子は『自分は人よりも劣っている』『どうせ社会へ出ても成功しない』という先入観が強い。それを払拭し、自力で明日を切り開くような大人に育ってほしいのです」

ここでは、年代ごとにグループ分けされた奨学生たちが月1回集まり、各自の学校生活の振り返りや自己ピーアールの練習、模擬討論、パソコン研修などに取り組む。これまでに45人が奨学制度を活用して社会へ旅立っている。

この日集まったのは、高校生と大学生から成るシニアクラスのメンバー18人。互いの近況を報告し合う彼女たちの表情は、劣等感とは無縁の明るさに満ちていた。

「これから何をするのですか?」と質問すると、一人の女性から「じゃあディベートをやるので、何かテーマを下さい」と返された。元奨学生の彼女は、いまはNGOスタッフとして、アミーラさんのサポート役を担っているという。

突然のリクエストに面食らう記者を見て、「考えている間に、私の民族の歌を歌ってあげる」と、一人の学生が立ち上がった。かと思えば、「じゃあ私は、友達に教えてもらった、とっておきのジョークを話すわ」と、また別の学生。

「次は私」「私も!」と次々に手を挙げる学生たち。そうこうするうちに話は自然と盛り上がり、いつしかアミーラさんを交えた議論へと発展した。

「政治家の息子が事件を起こして逮捕されたのに、すぐに釈放されたと聞いた。みんな、どう思う?」「ラジオで、体の不自由な女性が苦しみを訴える投書が読まれていた。私たちに何ができるんだろう?」

しばらく議論に耳を傾けていたアミーラさんは、学生なりのさまざまな意見に理解を示してから、自らの思いを分かりやすく話す。その目を真っすぐ見据えて聴き入る学生たちの姿が印象的だった。

最後に、全員でネパール語の歌を歌ってくれた。学生たちのためにNGOスタッフが贈った〝励ましの歌〟だという。

「私たちは成功します、いつの日か。そう心の底から信じます」

「前を向いて歩み続けます。そして必ずゴールにたどり着きます」

「ネパールの明るい未来、笑顔あふれるネパール。私たちの夢を実現します――」

「もう一度一緒にやりたい」

20年の間には山もあれば谷もあった。

政情不安が続くなか、2002年には反政府組織の襲撃によって、パンチカールの現地事務所が全焼するという事態が発生した。

「人づてに聞いた彼らの言い分は『トウモロコシを挽こうとしたら、付いている虫まで一緒に挽いてしまった』だった。NGOの看板を掲げているだけで、政府に近い団体と見られたのでしょう」

「スタッフの身を危険にさらしてまで続けられない」。いったん現地事務所を引き揚げ、村への行き来も途絶えた。一時は、村での活動継続を諦めかけたこともあった。

そんなある日、数人の村人たちがカトマンズの事務所を訪ねてきた。

「私たちは、もう一度あなたたちと一緒にやりたいんだ」

人々の熱意を受け、06年の停戦合意後に村での活動を再開。村人たちは、現地事務所の苗床を自分たちで管理しながらアミーラさんらスタッフの再訪を待ちわびていた。

「いままでやってきたことは間違いじゃなかったのかなって思うと、すごくうれしかった」

◇

さまざまな壁にぶつかりながらも、ひたすら前を向いて歩いてきたアミーラさん。そんな彼女にも、30年来胸にしまったままの疑問がある。

「松本先生は、なぜ自分を日本へ留学させたのか?」

真意を聞けないまま、松本会長は2010年3月に77歳で出直した。

その前年、NGO活動の成果が高い評価を受け、AOTSの研修報告会の席上で表彰されたアミーラさんの姿を見届けた後のことだった。

「結局、理由は分からないまま。でも考えたら、いまの私は、松本先生が自分にしてくださったことを、自分の周りの若い人たちに少しでもしようとしているだけなのかもしれない」

それは、人を育てること。母国の未来を切り開く人材を、一人でも多く。天空に迫るヒマラヤの雄姿にも重なるような高い高い志だ。

昨年7月、アミーラさんはおぢば帰りの際、持参したヒマラヤザクラの種を営繕部造園課へ託した。「日ごろ、ようぼくらしいことは何一つできていない」と謙遜するアミーラさんにとって、自分を育ててくれたおぢばへの、ささやかな恩返しだったのかもしれない。

数年後、親里の街のどこかに、季節外れのサクラが花開く日を夢見て。

文＝榊　幸浩
写真＝佐藤秀春

奨学生の研修では、自らディベートに加わるひと幕も（パンチカールで）

週末は活動現場へ。村の近況や今後の課題などについて人々と話す（バジャラバラヒで）

アミーラ・ダリ

◎1955年カトマンズ生まれ。飛び級に次ぐ飛び級で、12歳で高校卒業。国立トリブバン大学大学院修了後、天理大選科日本語科（当時）へ。上智大大学院で国際経営学を学んだ後、AOTSの企業研修を経て帰国。日本で学んだビジネスのノウハウを生かし、日本のODAを扱う日系貿易会社の現地マネージャーとして活躍。2009年、これまでのNGO活動が認められ、AOTS「社会貢献大賞」受賞。
◎ネワール族出身。5人姉弟の長女。父親は数学教師。妹のアルナ・バイディヤさん（49歳・同教会教人）はネパール連絡所の所員。
◎長女出産直後から、経済的な事情などで親元から離れた子供を預かるようになった。現在の里子は3人。「日本語ではサトオヤっていうの？　みんな民族が違うから、習慣も方言もバラバラで大変。でも楽しいですよ」
◎最近、日本で網膜の手術を受けたアミーラさん。愛用の眼鏡は近眼、老眼、紫外線防止の兼用。

苗木の入った鉢を前に、一つひとつの品種について説明するアミーラさん（パタン郊外で）